

タイトル「**2022年度危機管理学部(公開)**」、フォルダ「**危機管理学部**」
シラバスの詳細は以下となります。



科目ナンバー	RMGT4601		
科目名	ゼミナール I		
担当教員	川中 敬一		
対象学年	3年,4年	開講学期	前期
曜日・時限	火 4		
講義室	1313	単位区分	選必
授業形態	演習	単位数	2
科目大分類	専門		
科目中分類	専門統合		
科目小分類	専門統合・演習		
科目の位置付け（開発能力）	■ D Pコード-学修のゴールを示すディプロマポリシーとの関連 D P 1－E 〔学識・専門技能〕 専門分野にかかる理論知と実践知を獲得し利用することができる。 D P 4－F 〔探求力・課題解決力〕 問を設定し又は論点を特定し、それに対する答・結論・判断を合理的に導くために、論拠の収集と分析を体系的に行うとともに、オープンエンドな問題・課題に答えるための方略をデザインし、検証し実行することができる。 D P 3－G 〔状況把握力・判断力〕 自らの置かれた状況、及び自己が帰属する集団の内外の状況を的確に把握し、適切に対応することができる。 D P 4－I 〔理解力・分析力〕 文章表現、数値データを適切に扱いつつ、情報の収集と取捨選択、分析と加工を有効かつ円滑に行い、課題の解決につなげることができる。 D P 6－K 〔表現力・対話力〕 文章及び口頭で、自らの考えを的確に表現し、他者に過不足なく伝達することができる。 D P 7－C 〔他者理解・倫理観・公共心〕 人間の行動の正誤に関する推論に正面から取り組み、社会的な存在としての自己の行動原理を獲得することができる。 D P 7－L 〔協働力・牽引力〕 集団的に課題解決を行う際に、自己の立場や責任を認識し、互いに集団の連帯を強めることができる。 D P 8－M 〔省察力〕 知識と経験とを関連付け学修成果を活用可能な状態に高めるとともに、これを新しく複雑な状況に転移させ課題解決につなげることができる。 ■ C Rコード-学修を通じて開発するマインドセット・ナレッジ・スキルを示すコモンルーブリック（C R）との関連 B 1 自己啓発（5%） C 1 倫理的思考・社会認識（5%） E 1 学識と専門技能（15%） F 1 探求と論拠（5%） F 2 課題解決（5%） G 1 状況把握（10%） I 1 理解・分析と読解（5%） I 3 情報分析（5%） K 1 ライティング・コミュニケーション（10%） K 2 オーラル・コミュニケーション（10%） L 1 チームワーク（15%） M 1 統合的・応用的学修（10%）		
教員の実務経験	防衛省本省及び研究機関、並びに、自衛隊上級司令部幕僚、部隊指揮官、防衛大学校教官等勤務、そして、周辺諸国の国家・軍事戦略の研究と対謀略活動を含む情報活動を加えて30余年勤務してきました。この職務上の経験を通じて、国際関係においては、文化、経済と軍事とが密接に絡み合い、それが政治活動の原動力となっている現実を痛感しました。こうした担当		

	教員の実務経験を踏まえて、日本ではあまり顧みられない軍事を視野に入れたトータル・グローバルリズムを毎回講義し考えていきたいと思います。（第1～15回）
成績ターゲット区分	■成績ターゲット 能力開発の目標ステージとの対応 3 発展期 ～ 4 定着期
科目概要・キーワード	危機管理とその基礎となる法学に関する専門的な研究活動を実践するために、必要な研究の手法を学び、学生自らが個人の研究テーマを設定し、研究論文を執筆するための指導を行います。学生自らが危機管理に関する問題を発見し、仮説を構築し、自力で仮説を検証することにより、問題の解決につなげ、危機管理能力を養います。ここでは、問題意識を確立し、卒業論文につながる個人研究のテーマを決定すると同時に、先行研究を収集して専門領域に関する知識を獲得します。授業形態は演習形式により行います。なお、対応するコンピテンスに基づき効果的な授業方法として、又は各授業を補完・代替するためのオンライン授業を一部取り入れる場合があります。 ■キーワード； 淵源と経緯、不変と可変、多面と立体
授業の趣旨	■副題 アメリカの対外観と中国の世界観との概要を明らかにします。 ■授業の目的 国際社会において、ある主体が長時間を費やして意識裡、或いは、無意識裡に形成してきた思考と行動の原則的法則性を把握し、もって当該主体の意図を看破する方法を修得することを目的とします。その目的達成のために、当該主体が置かれてきた地勢的条件、文化的背景、そして、内外の政治的環境に関する基礎的知識を習得します。その知識に立脚して、人間の集団である国際社会の主体の環境によって変化する部分（可変部分）と、環境によっても変化が乏しい部分（不変部分）とを類別する能力を涵養します。こうした歴史的手法と政治・文化的手法とを駆使して、複数の主体が関わる国際社会における課題解決能力を身に付けます。こうしたプロセスを経て、冒頭に記述した本授業の目的を達成します。 ■授業のポイント ある時期まで、人類は、いくつかの地理的、文化的世界ごとに、当該地域内で比較的孤立して完結的にそれぞれの観念を形成していました。これを観念的ブロックないし観念的主体と呼ぶことにします。ところが、ある時期から、これら孤立し完結していたブロックないし主体が接触することにより、相互に影響し合うようになりました。その相互関係は、概ね平等なものではなく、支配と被支配という不平等なものであり、友好的であるよりも敵対的であったことは忘れるわけにはいきません。ここで重要なことは、あるブロックないし主体が接触に至る過程です。これら複数のブロックないし主体のどちらか片方、或いは、双方が有形無形の拡張をしなければ接触は起こりません。その拡張が、どのような条件のもとに、どのような意図をもってなされたのか、という問題は、今日の世界におけるブロックないし主体間の摩擦や対立の根源的要素となっていると言えます。これは、いわば世界観、死生観といった価値観が接触することによる観念上の摩擦や対立に見られます。他方、異なる観念が接触しても摩擦も対立も生じないことがあります。同時に、類似の観念が接触しても摩擦や対立が生じることがあります。これらのケースは、観念上の問題を希薄化するだけの利害関係が介在する場合に生じます。 いずれにせよ、ある状況に対して、ある主体が、なぜそのように感じ、なぜそのように考え、なぜそのように行動するのか、という問題の根源をなしていると言えるのです。そして、その根源たる何かは、今日におけるその主体の行動パターンに少なからず影響するのです。 本授業においては、複数の主体が接触することにより生じる摩擦や対立を減衰させる、もしくは、摩擦や対立に勝利するためには、異なる主体に関する上述した「何か」が「何であるのか」が意識されねばならないことを歴史を通じて、まずは、知識として蓄積することを重視します。そして、その知識を自らの関心に即して、組み立てて実効的にするには、どのように思索し、何を情報資料として求めるのかを学ぶことになります。
総合到達目標	■学生は、アメリカと中国との近現代史に関する基本的、かつ、基盤的知識を習得することにより、現今におけるアジア・太平洋の諸情勢における不変的潮流を看破し、正確な将来予測をする能力を修得することができる。 (1)学生は、中国による海洋進出の淵源、目的及び現状に関する概要を説明することができる。（第1～3回） (2)学生は、アメリカの海権思想と近・現代アメリカによる対外活動との関連を説明することができる。（第5～9回） (3)学生は、今日の中国近・現代史から、今日における中国の各種動向を淵源を説明することができる。（第10～14回） ■学生は、自らの関心事が現状に至るまでの長期的時間経過（歴史）に関する知識を蓄積し、それらを縦貫する共通点と特異点とを整理することにより、現状の定位（意義）と将来を予測する精度の高い尺度を構築することができる。 ・学生は、各回授業で修得した歴史的アプローチを参考として、自己の卒業研究に関する計画策定作業を通じて、現状の意義と将来予測に寄与する高精度の尺度構築の基盤を修得することができる。（第15回） ■学生は、自らの関心事の深層解明に有為な情報資料源と有害な情報資料源とを峻別する基準

	を修得することができる。 ・学生は、指導教員の助言を参考として、自己の卒業研究に寄与する資料を選択することができる。（第2～15回）						
成績評価方法	■レポート3回（60%）：適用ルーブリック E1・F1・F2・I1・I3・K1・K2・M1 （評価の観点）授業で習得した知識を基盤に、教員から提示された課題に対して、教科書や参考文献を活用して、思索をめぐらして創造的な考察を展開できているか。 （フィードバックの方法）後日、教員からの提示されるコメントをもって、異なる視点、或いは、より精緻な分析のための参考を提供します。 ■学生発表・討議2回（40%）：適用ルーブリック B1・C1・E1・G1・L1 （評価の観点）卒業研究に関する各課題に対して真摯に向き合い、各種資料に触れながら、明解かつ実行可能な研究計画を立案できるか。 （フィードバックの方法）授業（卒業研究関連発表）における教員からの指導及び学友からの指摘をもって、研究計画の具体性を高めるための参考を提供します。						
履修条件	歴史に拒絶感のない学生を希望します。						
履修上の注意点	本ゼミナールは、2つの要素から構成されます。 第1は、危機的事象に対処するための前提となる情勢分析に求められる基本的知識とその活用法を学ぶことです。 第2は、卒業研究における卒業論文執筆の作業進捗に対する教員からの指導及び学友からの指摘を受けることです。 第1の要素に関しては、指定教科書を読書し、当該指定読書箇所に関する教員から提示される課題に対して自己の考察を展開します。その際、読書指定箇所の要旨要約は最小限にとどめ、自己の考察を論理的に展開することに力点を置いてください。 第2の要素に関しては、以下の点に留意しながら進めてください。 ①自己が取り組む研究の分野を明確にすること。 ②研究の究極的な目的は何かを明確にすること。 ③どのような研究手法を採用するのか。 ④自己に与えられた許容時間内に完結できること。 ⑤どのような資料を主用するのか。 ⑥研究の独創性は何か。 以上5点を第4回授業までに思考し、その結果に対する指導、指摘を参考に再考し、第15回授業までの間、随時、教員の指導を受けるようにしてください。						
授業内容	<table border="1"> <thead> <tr> <th>回</th><th>内容</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td><td> ①授業テーマ ガイダンス（授業の意義、授業の進行方式、成績評価、学生個人研究の説明）、昨今の中国海洋進出（中国の海洋進出の概要を説明） ②授業概要 （ガイダンス）学生は、本授業専用ノートの記載要領、予習・復習の具体的な進め方、学生個人研究の進め方、レポート作成要領、学生発表・討議要領及び評価の基準等）を確認する。（B1） （昨今の中国海洋進出）学生は、授業冒頭で配布されるプリント『中国の海洋進出』の概要のポイントを説明することができる。（C1・E1・G1・I1） なお、担当教員が中国人民解放軍軍人を含む多くの各国軍人や国防実務者との学術・実務的接触や意見交換から得られた知見等の実務経験を踏まえた講義を毎回実施します。 ③予習（30分） 学生は、本授業専用ノートを準備し、シラバスを熟読する。 ④復習（210分） 学生は、配布プリント『中国の海洋進出』を熟読する（E1）とともに、個人研究テーマの分野を思考する（B1、I1、M1）。 </td></tr> <tr> <td>2</td><td> ①授業テーマ 現代中国の海洋進出の実相（1） ②授業概要 学生は、昨今における中国の海洋進出活動展開の淵源と究極的目的を説明することができる。（C1、E1、I1、K1、K2） 説明は、第1回授業で教員から提示される課題に対して、指名学生が司会の下で答申する形態をとる。 なお、担当教員が中国人民解放軍軍人を含む多くの各国軍人や国防実務者との学術・実務的接触や意見交換から得られた知見等の実務経験を踏まえた講義を毎回実施します。 なお、担当教員が中国人民解放軍軍人を含む多くの各国軍人や国防実務者との学術・実務的接触や意見交換から得られた知見等の実務経験を踏まえた講義を毎回実施します。 </td></tr> </tbody> </table>	回	内容	1	①授業テーマ ガイダンス（授業の意義、授業の進行方式、成績評価、学生個人研究の説明）、昨今の中国海洋進出（中国の海洋進出の概要を説明） ②授業概要 （ガイダンス）学生は、本授業専用ノートの記載要領、予習・復習の具体的な進め方、学生個人研究の進め方、レポート作成要領、学生発表・討議要領及び評価の基準等）を確認する。（B1） （昨今の中国海洋進出）学生は、授業冒頭で配布されるプリント『中国の海洋進出』の概要のポイントを説明することができる。（C1・E1・G1・I1） なお、担当教員が中国人民解放軍軍人を含む多くの各国軍人や国防実務者との学術・実務的接触や意見交換から得られた知見等の実務経験を踏まえた講義を毎回実施します。 ③予習（30分） 学生は、本授業専用ノートを準備し、シラバスを熟読する。 ④復習（210分） 学生は、配布プリント『中国の海洋進出』を熟読する（E1）とともに、個人研究テーマの分野を思考する（B1、I1、M1）。	2	①授業テーマ 現代中国の海洋進出の実相（1） ②授業概要 学生は、昨今における中国の海洋進出活動展開の淵源と究極的目的を説明することができる。（C1、E1、I1、K1、K2） 説明は、第1回授業で教員から提示される課題に対して、指名学生が司会の下で答申する形態をとる。 なお、担当教員が中国人民解放軍軍人を含む多くの各国軍人や国防実務者との学術・実務的接触や意見交換から得られた知見等の実務経験を踏まえた講義を毎回実施します。 なお、担当教員が中国人民解放軍軍人を含む多くの各国軍人や国防実務者との学術・実務的接触や意見交換から得られた知見等の実務経験を踏まえた講義を毎回実施します。
回	内容						
1	①授業テーマ ガイダンス（授業の意義、授業の進行方式、成績評価、学生個人研究の説明）、昨今の中国海洋進出（中国の海洋進出の概要を説明） ②授業概要 （ガイダンス）学生は、本授業専用ノートの記載要領、予習・復習の具体的な進め方、学生個人研究の進め方、レポート作成要領、学生発表・討議要領及び評価の基準等）を確認する。（B1） （昨今の中国海洋進出）学生は、授業冒頭で配布されるプリント『中国の海洋進出』の概要のポイントを説明することができる。（C1・E1・G1・I1） なお、担当教員が中国人民解放軍軍人を含む多くの各国軍人や国防実務者との学術・実務的接触や意見交換から得られた知見等の実務経験を踏まえた講義を毎回実施します。 ③予習（30分） 学生は、本授業専用ノートを準備し、シラバスを熟読する。 ④復習（210分） 学生は、配布プリント『中国の海洋進出』を熟読する（E1）とともに、個人研究テーマの分野を思考する（B1、I1、M1）。						
2	①授業テーマ 現代中国の海洋進出の実相（1） ②授業概要 学生は、昨今における中国の海洋進出活動展開の淵源と究極的目的を説明することができる。（C1、E1、I1、K1、K2） 説明は、第1回授業で教員から提示される課題に対して、指名学生が司会の下で答申する形態をとる。 なお、担当教員が中国人民解放軍軍人を含む多くの各国軍人や国防実務者との学術・実務的接触や意見交換から得られた知見等の実務経験を踏まえた講義を毎回実施します。 なお、担当教員が中国人民解放軍軍人を含む多くの各国軍人や国防実務者との学術・実務的接触や意見交換から得られた知見等の実務経験を踏まえた講義を毎回実施します。						

	③予習（120分） 学生は、配布プリント『中国の海洋進出』を読了後、その要旨及び自己の所見をA 4版2枚以内にまとめる。 ③復習（120分） 教員ーマ 現代中国の海洋進出の実相（1） ②授業概要 学生は、昨今における中国の海洋進出活動展開の淵源と究極的目的を説明することができる。（C 1、E 1、I 1、K 1、K 2）なお、説明は、第1回授業で教員から提示される課題に対して、指名学生の司会の下で答申する形態をとる。 による細部説明及び参考図書を利用して、予習で行った要約と所見を修正し、それを本ゼミ専用ノートに記述する。
3	①授業テーマ 現代中国の海洋進出の実相（2） ②授業概要 学生は、中国の建国理念とアメリカの不変的アジア・太平洋政策との協調・対立関係の骨幹を説明することができる。（E 1・I 1・K 1・K 2）なお、説明は、第1回授業で教員から提示される課題に対して、指名学生の司会の下で答申する形態をとる。 なお、担当教員が中国人民解放軍軍人を含む多くの各国軍人や国防実務者との学術・実務的接触や意見交換から得られた知見等の実務経験を踏まえた講義を毎回実施します。 ③予習（120分） 学生は、配布プリント『中国の海洋進出』を再読し、自己の読書指定箇所に対する再考結果及び修正所見をA 4版1枚以内にまとめる。 ④復習（120分） 授業における教員による説明を参考に、別途提示する課題に対するレポートを作成する。
4	①授業テーマ 個人研究テーマの選定 ②授業概要 学生は、指名学生の司会の下、個人卒業研究の該当分野及びテーマ案を発表し、その内容を説明できる。（B 1・F 1・F 2・I 1・K 1・K 2・L 1・M 1） なお、担当教員が中国、台湾及び米国軍事学術機関との意見交換、並びに、防衛省機関及び部隊等における実務経験を経て得られた知見等を踏まえた講義を毎回実施します。 ③予習（120分） 卒業研究において、いかなる分野のどのような部分を取り上げたいのかを熟考し、その結果をA 4版1枚にて「研究計画素案」として作成する。 ③復習（120分） 授業における教員からの指導を本授業専用ノートに記録し、再度、取り上げたい分野とテーマ（仮）をA 4版1枚にまとめる。
5	①授業テーマ 近・現代アメリカ対外活動史（1） ②授業概要 学生は、マハーン海権思想の要旨と、同思想が歴史に与えた具体的事象を説明できる。（E 1・I 1・K 1・K 2）なお、説明は、第1回授業で教員から提示される課題に対して、指名学生の司会の下で答申する形態をとる。 なお、担当教員が主として米国軍人や国防実務者との学術・実務的接触や意見交換から得られた知見等の実務経験を踏まえた講義を毎回実施します。 ③予習（120分） 教科書『マハーン海上権力論集』（11～63頁）を読書し、その要旨をA 4版1枚程度にまとめる。 ④復習（120分） 教員からの指導、コメントを参考にして、マハーン海権思想の要旨と、同思想が歴史に与えた具体的事象に関する予習で作成した自己の要約を加筆・修正し、それを本授業専用ノートに記述する。
6	①授業テーマ 近・現代アメリカ対外活動史（2） ②授業概要 学生は、マハーンの著作である「海上権力の歴史に及ぼした影響（抜粋）」における①海上権力の定義、②海軍の役割、③海上権力の3要素、④海上権力を左右する6つの条件を説明することができる。（E 1・I 1・K 1・K 2）なお、説明は、第1回授業

	で教員から提示される課題に対して、指名学生の司会の下で答申する形態をとる。 なお、担当教員が主として米国軍人や国防実務者との学術・実務的接触や意見交換から得られた知見等の実務経験を踏まえた講義を毎回実施します。 ③予習（180分） 教科書『マハン海上権力論集』（64～93頁）を讀書し、①海上権力の定義、②海軍の役割、③海上権力の3要素、④海上権力を左右する6つの条件を整理し、A4版1枚に記述する。 ④復習（60分） 教員からの指導、コメントを参考にして、マハンの海権思想における核心を再整理し、それを本授業専用ノートに記述する。
7	①授業テーマ 近・現代アメリカ対外活動史（3） ②授業概要 学生は、19世紀後半におけるアメリカの対外政策転換の背景と、アメリカの海外進出（侵略）パターンの原型をハワイ併合を例として説明できる。（E1・I1・K1・K2）なお、説明は、第1回次授業で教員から提示される課題に対して、指名学生の司会の下で答申する形態をとる。 なお、担当教員が主として米国軍人や国防実務者との学術・実務的接触や意見交換から得られた知見等の実務経験を踏まえた講義を毎回実施します。 ③予習（180分） 教科書『マハン海上権力論集』（94～139頁）を讀書し、19世紀後半におけるアメリカの対外政策転換の背景と、アメリカの海外進出（侵略）パターンの原型をハワイ併合を例とした考察結果を、それぞれA4版1枚に記述する。 ④復習（120分） 教員からの指導、コメントを参考にして、19世紀後半におけるアメリカの対外政策転換の要因と、アメリカの海外進出（侵略）パターンを再整理し、それを本授業専用ノートに記述する。
8	①授業テーマ 近・現代アメリカ対外活動史（4） ②授業概要 学生は、19世紀末から20世紀初頭にかけての期間におけるアメリカの基本的対外観と海軍建設構想との関連を具体的、かつ、論理的に考察し説明することができる。（E1・I1・K1・K2）なお、説明は、第1回次授業で教員から提示される課題に対して、指名学生の司会の下で答申する形態をとる。 なお、担当教員が主として米国軍人や国防実務者との学術・実務的接触や意見交換から得られた知見等の実務経験を踏まえた講義を毎回実施します。 ③予習（180分） 教科書『マハン海上権力論集』（140～221頁）を讀書し、19世紀末から20世紀初頭にかけてのアメリカン・エリートの異文化観の要旨をA4版1枚程度に記述する。 ④復習（60分） 教員からの指導、コメントを参考にして、アメリカン・エリートの伝統的な異文化観を再整理して、それを本授業専用ノートに記述する。
9	①授業テーマ 近・現代アメリカ対外活動史（5） ②授業概要 学生は、19世紀末から20世紀初頭にかけての期間における、アメリカのアジア観と、そこから導かれて希求したものは何かを具体的、かつ、論理的に考察し説明することができる。（E1・I1・K1・K2）なお、説明は、第1回次授業で教員から提示される課題に対して、指名学生の司会の下で答申する形態をとる。 なお、担当教員が主として米国軍人や国防実務者との学術・実務的接触や意見交換から得られた知見等の実務経験を踏まえた講義を毎回実施します。 ③予習（120分） 教科書『マハン海上権力論集』（222～260頁）を讀書し、アメリカのアジア進出の最終的目的は何かを具体的に列挙し、それを列挙理由とともにA4版1枚程度に記述する。 ④復習（120分） 教員からの指導、コメントを参考にして、アメリカの19世紀末におけるアジア関与の動機と今日の動機との相違点と共通点を考察し、それを本授業専用ノートに記述する。
10	①授業テーマ 中華世界における伝統的歴史観 ②授業概要 学生は、中華世界における伝統的歴史観の要旨と、それが今日の中国の内外情勢に対

	する姿勢にいかなる現象となつて影響を与えているかを具体的に考察し説明することができる。(E1・I1・K1・K2)なお、説明は、第1回授業で教員から提示される課題に対して、指名学生の司会の下で答申する形態をとる。 なお、担当教員が中国学術研究者や情報機関担当者との学術・実務的接触や意見交換から得られた知見等の実務経験を踏まえた講義を毎回実施します。 ③予習(120分) 教科書『中国の論理』(i～viii頁及び4～49頁)を讀書し、讀書指定箇所の要旨をA4版1枚以内、今日にも中華世界における伝統的歴史観が継続した結果と思われる現象を1つ挙げ、A4版1枚以内に論述する。 ④復習(120分) 授業中における教員の解説・指導を参考にして、今日の中華世界(大陸、台湾、香港)において、伝統的歴史観が強く影響していると思われる事象を、理由を付して本授業専用ノートに記述する。
11	①授業テーマ 中華世界の伝統的社會・政治構造 ②授業概要 学生は、中華世界における伝統的社會・政治構造の要旨と、それらが今日の中国社会において残存していると思われる事象を具体的、かつ、論理的に考察し説明することができる。(E1・I1・K1・K2)なお、説明は、第1回授業で教員から提示される課題に対して、指名学生の司会の下で答申する形態をとる。 なお、担当教員が中国学術研究者や情報機関担当者との学術・実務的接触や意見交換から得られた知見等の実務経験を踏まえた講義を毎回実施します。 ③予習(120分) 教科書『中国の論理』(52～91頁)を讀書し、今日の中華世界(大陸、台湾)における伝統的社會と政治構造との相違点と類似点を、理由を付して具体的にA4版1枚程度に記述する。 ④復習(120分) 授業中における教員の解説・指導を参考にして、予習において記述した内容に加筆・修正を加えたものを、本授業専用ノートに記述する。
12	①授業テーマ 中華世界の伝統的世界観と世界秩序 ②授業概要 学生は、中華世界における伝統的世界観と秩序観の要旨と、それらの延長に位置していると思われる現代中国の對外政策及び活動との関連を、具体的、かつ、論理的に考察し説明することができる。(E1・I1・K1・K2)なお、説明は、第1回授業で教員から提示される課題に対して、指名学生の司会の下で答申する形態をとる。 なお、担当教員が中国学術研究者や情報機関担当者との学術・実務的接触や意見交換から得られた知見等の実務経験を踏まえた講義を毎回実施します。 ③予習(120分) 教科書『中国の論理』(94～128頁)を讀書し、伝統的世界観と秩序観と今日の中華世界(大陸、台湾)の對外政策及び行動との相違点と共通点とを、理由を付して具体例を挙げてA4版1枚程度に記述する。 ④復習(120分) 授業中における教員の解説・指導を参考にして、予習ペーパーを修正・加筆した内容を、本授業専用ノートに記述する。
13	①授業テーマ 西洋との邂逅による伝統的中華の変容 ②授業概要 学生は、近代中国(清帝国及び中華民国)と西洋(日本を含む)との邂逅によって、堅持された部分と変容した部分とを具体的に列挙して、その連続性を論理的に考察し説明することができる。(E1・I1・K1・K2)なお、説明は、第1回授業で教員から提示される課題に対して、指名学生の司会の下で答申する形態をとる。 なお、担当教員が中国学術研究者や情報機関担当者、軍人との学術・実務的接触や意見交換から得られた知見等の実務経験を踏まえた講義を毎回実施します。 ③予習(120分) 教科書『中国の論理』(130～172頁)を讀書し、西洋との邂逅によって中華世界にもたらされ、それが今日の中華世界(大陸及び台湾)に継承されていると思われる「屈辱感」とは何かを、理由を付して具体例を挙げてA4版1枚程度に記述する。 ④復習(120分) 授業中における教員の解説・指導を参考にして、今日に継承されている屈辱感が、大陸と台湾に与えている具体的現象を、本授業専用ノートに記述する。
14	①授業テーマ 近代中国革命と文化との関係

	②授業概要 学生は、清帝国末期の改革運動から中華人民共和国成立までの期間、改革、或いは、革命運動における主体ごとの共通理念と相違部分とを分類して、具体的に考察し説明することができる。（E 1・I 1・K 1・K 2）なお、説明は、第1回授業で教員から提示される課題に対して、指名学生の司会の下で答申する形態をとる。 なお、担当教員が中国学術研究者や情報機関担当者、軍人との学術・実務的接触や意見交換から得られた知見等の実務経験を踏まえた講義を毎回実施します。 ③予習（120分） 教科書『中国の論理』（174～211頁（※198～205頁を除く））を読書し、大陸にとつての台湾問題及び海洋問題とにおけるそれぞれの本質と、両者における共通点と相違点とを、A 4版2枚以内に記述する。 ④復習（120分） 第2及び第3回授業の内容、並びに、授業中における教員の解説・指導を参考にして、今日の中華人民共和国の究極的目的と、対外脅威対象を、本授業専用ノートに記述する。
15	①授業テーマ 個人卒業研究計画素案発表（第1回） ②授業概要 学生は、指名学生の司会の下、第4回授業で修正した研究テーマを発表し、同時に個人卒業研究の目的を端的に説明できる。なお、可能ならば、研究実行（卒業論文執筆）の概略構成を端的に説明できる。（B 1・F 1・F 2・I 1・K 1・K 2・L 1・M 1） なお、担当教員が中国及び米国を初めとする軍人・国防実務担当者、情報機関担当者及び学術研究者との学術・実務的接触や意見交換から得られた知見等を踏まえた所見を交えた講義を実施します。 ③予習（120分） 以下の6点の内容を盛り込んだ研究計画書（素案）をレジュメ形式にして、教員及び全学友分のコピーを準備する。 - 自己が取り組む研究の分野。 - 研究の究極的な目的。 - 研究手法。 - 許容時間内の完結の可否。 - 主用資料。 - 研究の独創性。 ③復習（120分） 授業中の教員及び学友からの指導・指摘を本授業専用ノートに記録する。その指導・指摘を参考にして、研究計画書を修正・加筆する。
関連科目	危機管理基礎演習Ⅰ(RMGT2601)、ゼミナールⅡ(RMGT4602)、ゼミナールⅢ(RMGT4603)、ゼミナールⅣ(RMGT4604)
教科書	■配布プリント 『中国の海洋進出』第4章 ■市販教科書 (1) 麻田貞雄『マハン 海上権力史論集』講談社、2010年、ISBN:978-4-06-292027-8 (2) 岡本隆司『中国の論理』中央公論社、2016年、ISBN:978-4-12-102392-6 (3) 石黒圭『この1冊できちんと書ける！ 論文・レポートの基本』（日本実業出版社、2012年）ISBN:978-4-53404927-8（1,400円（税抜））
参考書・参考URL	以下の他、授業中に逐次、教員から別途案内します。 (1) 末里周平『セオドア・ルーズベルトの生涯』丸善ブラネット、2013年、ISBN:978-4-86345-1735 (2) 秋元栄一・菅英輝『アメリカ20世紀史』東京大学出版会、2003年、ISBN:978-4-13-022020-0 (3) ジョージ・F・ケナン『アメリカ外交50年』岩波書店、2000年、ISBN 4-00-600030-8 (4) アーネスト・メイ『歴史の教訓』岩波書店、2004年、ISBN 4-00-600120-7 (5) 渡辺惣樹『日本海克』草思社、2009年、ISBN:978-4-7942-1737-0 (6) 渡辺惣樹『誰が第二次世界大戦をおこしたのか』草思社、2017年、ISBN:978-4-7942-2277-0 (7) 松岡完、広瀬佳一、竹中佳彦、中島治久『冷戦史』同文館出版、2003年、ISBN:978-4-49546-331-1 (8) 竹内好『中国はどこへ行くのか』岩波書店、2000年、ISBN:978-4-00600-028-8 (9) 丸川哲史『魯迅と毛沢東』以文社、2010年、ISBN:978-4-75310-278-5 (10) 丸川哲史『中国ナショナリズム』法律文化社、2015年、ISBN:978-4-589-03692-6 (11) 斉藤眞・古矢旬『アメリカ政治外交史』東京大学出版会、2012年、ISBN:978-4-13-

	022020-0 (12) 佐藤望『アカデミック・スキルズ』慶應義塾大学出版会、2006年、ISBN:978-4-7664-1960-3（定価：1,000円（税別）） (13) 磯崎陽輔『分かりやすい公用文の書き方 改訂版（増補）』ぎょうせい、2018年、ISBN:978-4-324-10525-2（定価：2,000円（税別））
連絡先・オフィスアワー	■連絡先 開講時に告知します。 ■オフィスアワー 火曜日3限。それ以外の時間については、メール等で事前にアポイントをとることにより研究室等で対応します。
研究比率	■危機管理領域との対応 災害マネジメント30%：パブリックセキュリティ30%：グローバルセキュリティ40%：情報セキュリティ0% ■危機管理学と法学とのバランス 危機管理学90%：法学10%

